

精神科作業療法実践と生活療法（批判）の連関 ——大阪府立中宮病院における作業療法実践者へのインタビュー調査から

田島 明子^{*1)}、井口 高志²⁾

1) 聖隷クリストファー大学、2) 奈良女子大学

1. はじめに 生活療法は一時興隆したものの、使役性・管理統制性が批判され、その後衰退した。一方、医療職化の道を歩んできた作業療法にとって生活療法批判はその理論や実践の変容や進展を促した大きな出来事である。しかし当時の実践への影響についての詳細な研究はほとんど見当たらない。そこで本報告では、当時精神科作業療法に勤務していた作業療法士へのインタビューを通して、当時の作業療法実践の変容・進展から生活療法とその批判の連関を考察する。

生活療法は、1956 年に小林八郎によって提唱された。その中核的思想は“患者のしつけ”であり、入院中の患者に対して生活指導を行うなかで規律主義的、管理主義的、全体主義的な関わりを行った。精神病院には長期在院者が累積するなかで、生活療法という名の基に患者に作業（労働）を使役し、収奪するという悪質な病院もあった。そうした中、精神医療改革を旗印にした若い精神科医たちの働きかけで、1975 年の第 72 回精神神経学会総会において『作業療法』点数化に反対する決議」がなされた。これは作業を療法とした患者の権利剥奪に強く反対を表明するものであった。

2. 対象・分析方法 インタビュー対象者：T 氏、男性、78 歳（インタビュー時 76 歳）。インタビュー日時：2010 年 11 月 19 日、13 時～15 時まで、大阪府立精神医療センター（旧大阪府立中宮病院、以下中宮病院とする）インタビュー内容：インタビューガイドを作成し、事前に目を通してもらった。質問項目は次のとおりである。①T 氏のこれまでの経験、②生活療法批判の流れと中宮病院の関係、④作業療法士国家資格化の臨床への影響、⑤作業療法点数化について、である。

3. 結果と考察 **1) 中宮事件後の作業療法とその周辺** T 氏は高校卒業後、23 歳時に既に勤めていた友人の親戚の勧めで、1957 年 6 月に大阪府立中宮病院に就職した。その後 1963 年 10 月に、当時新しくできた社会復帰施設である砂川センターに出向し、1970 年に再び中宮病院勤務となった。T 氏が 1970 年に再び中宮病院に勤務になった時は中宮病院事件の最中であった。T 氏は病院改革の必要性から組合活動を始める。1972 年には当時特例で資格を取得した作業療法士 3 名（T 氏含まれる）で『作業療法の手引』を作成し、医局にも了承を得、処方箋、作業種目、手続きを明確化した。1975 年以降は、作業療法の検討委員会が発足し、診療報酬凍結後の 1977 年に新しい作業療法のプログラムを作成した。作業療法士の数も増え、3 人から 8 人にまで増員した。しかし古いレク体制として手工芸が半日残った。古いレク体制との攻防は続いた。それを T 氏は、院内への閉じ込め、対象者の意思を反映させない、治療的ではない（中宮事件後には内職収入は奨励金としてすべて患者に返還はしていたが、使役的側面が残る）側面を問題としていた。しかし作業療法が実績を高めてくると、診療報酬点数には連動しない手工芸はしだいに減少していった。**2) 作業療法実践と生活療法とその批判の連関** こうした作業療法の変化と生活療法批判との関連を T 氏に伺うと、「生活療法批判っていうものの煽りっていうのはあんまり受けてなくて、むしろ中宮事件のこととか、そういったことの方が大きく…」という返事である。その時代の作業療法の変革を担った T 氏にとって、日々の実践から生じる問題の解決が重要な事項であり、T 氏をはじめとした変革者たちによって中宮病院の作業療法が形作られもしている。ただその変化は生活療法批判を受けた理念的方向性とも軌を一にもしていることに注意をすべきで、生活療法批判という象徴的出来事が問題性のコントラストを浮かび上がらせ、変革の推進力になったのではないかと考える。